
永遠の歴史

匂宮 爆人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の歴史

【Nコード】

N6051P

【作者名】

匂宮 爆人

【あらすじ】

この物語は、世界を救った少年たちの物語である。
しかし、歴史は繰り返す……。

ハジマリ（前書き）

この物語は真実への1ピースである。

貴方はこの中で、世界の絶対保守者であるモノの名前を見るだろう。
貴方はこの中で、世界の絶対捕食者であるモノの名前を見るだろう。
決してそれを忘れるなかれ。

ハジマリ

ハジマリはなんだったのだろう。俺は村の牢屋の中でそう考えた。俺は何も悪いことをしていないのにここに閉じ込められている。そして、周りにいる人間もそうだ。よく見知った村の皆。全員が全員、ここに理不尽に閉じ込められているのだ。

ただ、人と言う存在は恐ろしい。人はこのような理不尽な環境でもだんだんと適応して、そして最後にはその中で優劣をつけたがる。だからこの牢屋の中にも一種の「ボス」的存在の奴がいる。そんな器の小さいボスなんて俺には関係ないが、この牢屋に何人も人が入っている限り、どうしてもかかわらなくてはいけない時が出てくる。

「おい、新入り！ お前はなんでこの牢屋に入れられたんだ？」

そんな事を考えていると、牢屋のボスがそんなことを俺に向けて言ってきた。俺は極力かわりたくなかったのでその言葉を見殺しにすることにした。

「おい、そのガキだよ。聞こえねえのか？」

聞こえている。ただし、応える義務もつもりもない。何故ならそんな無駄な事をして、こんな所に順応するより、今ここからどうやって脱出するかを考えた方がよっぽど有意義だからだ。

しかし、この牢屋に適応してしまった人間にはそんな考えは生まれないのだろう。ボスの横にいた1人の男がこちらへと歩いてきた。見た目はひよろひよろして弱そうだが、見ていた限りでは、ゴマのすり方がものすごい上手らしく、今の立ち位置につけたのだろう。

「ボスはお前に聞いてるんだよ！ 返事くらいしたらどうだ！？」
俺はその言葉も見殺した。いや、無視したと言うよりは本当に頭に入って無かったのかも知れない。

この鉄格子に囲まれた牢屋からどうやって脱出するか。石畳の床や、壁を削って脱出を試みるか。見回りに来た人間を倒し、格子の

隙間から鍵を入手して脱出するか。やり方は色々ありそうだが、どれもこれも上手くは行きそうにない。

「デメエがここに入れた理由をボスは聞いていらっしやるんだよっ！」

ひよろい男は、そんな性格で人一倍プライドが高いのだろう。俺がちよっと無視しただけですぐに俺の腹をつま先で蹴ってきた。もちろん俺は避けるつもりも何もなかったので、もろに腹に蹴りを貰い、そのまま石畳へと倒れこんだ。しかし、ひよろい男は止まらない。

「デメエ！ ボスの言葉を何度も無視しやがって！ さらに俺の事も無視するとは良い度胸じゃねえかよっ！？ ええっ！？」

地面に転がって何度も何度も蹴られながらなんとなく思い出す。俺がここに連れられた理由。

もともと村は平和なところだった。全員仲良く過ごしていて、村の皆でリングを育てて、それを売って必要な日用品を集めていた。そしてある日、俺たちの育てたリングを国王に献上するチャンスが舞い込んできた。これで国王に認められればこの村ももっと栄えると考えて、皆で頑張った。

いつも以上にしっかりと水の管理をして、いつも以上にしっかりと土の管理もして、いつも以上にしっかりと実を守り、いつも以上にしっかりと収穫をした。

その甲斐あって、リングは国王にとっても気に入って貰えた。しかし、それが問題だったのだ。

この村はゲイルザー王国の支配下だ。そして、その国王であるシャルルマーニュ・ゲイルザーは独占政治を行う、いわば絶対王政の国だ。

そのシャルルマーニュ・ゲイルサーが俺たちの村のリングを気に入ったのだ。放っておくはずがない。すぐに国から大量の兵士や機械が送り込まれ、リングを色々な街に出荷できる体制にされた。村

人はと言うと、商品の管理の邪魔になるから出ていけと言われ、皆路上に迷うことになってしまった。

今までリンゴを収穫して生きてきた俺たちが急に投げ出されても生活なんて出来るはずもなく、結局は工場化してしまった村の廃棄品をむさぼり生活することしかできなかったのだ。工場裏から出される、ただ形が悪いと言うだけで捨てられたリンゴをもとに俺たちは頑張って暮らしていた。しかし、リンゴを持っているとそれだけで兵士は俺たちを捕まえてきた。

「国王様の管理していらっしゃるリンゴを盗むとは、貴様死にたいらしいな」

そう言われ、最初は1番皆のために一生懸命に動いてくれたお兄さんが連れてかれた。俺は子供だからということ皆から守られ、結局最後の最後まで捕まらなかった。最後の最後まで捕まらなかったことで、解ったことがあった。工場にされたのは村長の家だ。それは皆知っていた。だけれども、国の兵士が来てから村長を見た人はいない。その事を捕まる前に1人のおじいさんに話した。

「村長さん、見えないけど何か知らない？」

「あいつは村を売ったんだよ……自分の利益のためだけにね」

つまり、村長が村人全員を犠牲にして甘い蜜をすすっている。これは絶対に許せないことだった。村長の子供である炎谷守羽ぬくたにかみはとは友人であったが、そんなことは関係ない。どうにかして村長を殺してやろうとも思った。

そして、俺が捕まる日が来たのだ。

村長の木と呼ばれる村で1番大きな木。俺と守羽が約束をした場所。

「たとえば村に何が起ころうと、俺はお前の事をここで待つよ」

「たとえば村に何が起ころうと、絶対ここで会おうね」

そう、そう言っていたのに、あいつはまだあの工場の中にいる。許さない。許されることではない。

そう思いながら、村長の木を見上げていた。すると、突風が吹き、

リングがひとつ落ちてきた。俺はそれには一切触れなかったが、近くで俺を凝視していた兵士が言った。

「リングを落とすとは何事か。貴様、ただで済むと思うなよ」

集まってくる兵士に俺は殴られ、蹴られ、縛られ、罵られ、そして最後には牢屋に叩き込まれた。

そうだ、これが俺がここに連れられてきた理由だ。

ガスッガスッと俺の脇腹を蹴る音が響く。俺はなんとなく牢屋をぼーっと眺めていた。

「このっこのっ！ まだ黙ってるのか、この糞ガキがっ！」

「やめろよ！ もう喋れなくなってるんだよ！」

ひょろい男が激昂して蹴り続けていると、他の男がそれを制した。もうかれこれ5分ほど蹴られ続けている。ぱっと見、もう動けないのは当然のことだろう。しかし、俺はこのタイミングを凶ってくれた男の考えを無視して立ち上がった。そして、この牢屋に来てから初めての言葉を発した。

「なるほど、この牢屋はただ閉じ込めるだけじゃなく、精神を摩耗していくためにも存在しているのか。どおりで馬鹿が多い」

こう吐き捨てた瞬間、ボスが立ち上がった。恐らく俺を殴り飛ばしてもするのだろう。それもそれで良い。もしかしたらそれで何か良いアイデアが浮かぶかも知れない。そう考えて俺はボスを睨んだまま立っていた。そして、ボスがそのこぶしを振り上げても睨んだまま動こうとはしなかった。しかし、次の瞬間――

「やめないか！ 大人げないのだ！」

そう声が響き、俺はついその方向を見た。

新緑の帽子に新緑の衣、全身新緑かと思いきや、胸に斜めにまいているベルトや腰についている3本のベルト、そしてサーカスのピエロの様な靴は茶色だった。しかし、魔法使いの様な帽子から覗かせる目や髪はまた緑色で、その男は異様な存在感を放っていた。

この男との出会いが、俺の今後の人生を大きく変える事となった

⋮
○

ゼクスとの出会い

全身緑色の男は言葉を発した後に、ゆっくりと立ち上がった。

「少年。少年の見解は正しいのだ。この牢屋は我々を閉じ込めておく他に、精神を摩耗する効果があるのだ。敢えて閉所にしきらず、さらに色を全体的に統一することにより、精神を摩耗するのだ」

そう言いながら、男はゆっくりとこちらに近づいてきた。

「時に少年。少年は何故この牢に入れられたのだ？」

目の前まで来て男はそう言った。俺は応えるつもりはなかったが、何故か応えなければいけない気がして、気付いた時には口が開いていた。

「冤罪だ」

そう応えた瞬間、牢屋の中の人間がざわつき始めた。それもそのはずだ。冤罪で入れられたなんて誰が信じるものか。

しかし、緑色の男は違った。

「何をどう勘違いされたのだ？」

「村長の木のリングを見てたら風が吹いて、リングが落ちてきた」
そう言った瞬間、緑色の男がまとう空気が変わった。

「少年。父親はどうしてるのだ？」

「父親？」

俺の父親は随分前に村を出て行ってしまった。アイリス女王国に行き、この村をゲイルザー王国の領土からアイリス女王国の領土にするために旅立っていった。父親は最後に会った時に俺にこう伝えていた。

「絶対アイリス女王国の最高の騎士団、神殿騎士になってこの村を救いに戻ってくるからな。それまで良い子で待ってるんだぞ」

そう伝えてから、もう何年も経つ。結局父親は約束を守らないまま消息を絶ったのだ。

「父親はずいぶん前に消息不明になったよ」

「あー……その選択は選ぶまでもないだろ」

そう言っ、俺はゼクスに対して手を伸ばした。すると、ゼクスは顔をあげて俺の手を掴んできた。

「私の修行は厳しいぞ、それでもついてくる自信があるのか？」

「ここで何もせずに死ぬよりはマシだろ」

「……神殿騎士副隊長ゼクスなのだ」

「神風が息子、風夢了也だ」

脱出劇

俺達だけ牢屋の中で違う空気の中に存在していた。何故ならば、既に出れることを前提にゼクスと話をしていたからだ。しかし、ゼクスは出れる気満々で話しているが、俺には全然出れる確信が無かった。

「なあ、ゼクス」

「なんなのだ？」

「この牢屋、鍵閉まってるけど出れるのか？」

そう尋ねると、ゼクスは腹を抱えて肩を小刻みに震わせた。顔は見えないし、声も聞こえないが、どうやら笑っているらしい。

「この程度の牢屋開けられないで、神殿騎士が務まるか……なのだ」震えた声でそう言っ、ゼクスは牢屋の入口へ向かって歩いて行った。当然の事ながら鍵は閉まっている。

ゼクスは鍵が閉まっている事を確認すると、どこからともなく大きく湾曲した剣を取り出した。その刃も不思議な形だが、何より奇妙なのはその持ち手の部分だ。持ち手はまるで鍵の形で、刃も全て合わせれば、その形は完全に鍵であった。

「ゼクス、その剣は？」

「この剣は『鍵』なのだ」

「かぎ……？」

そう問い掛けると、ゼクスはまあ見ていろうと言わんばかりの表情を浮かべて、こっちを一瞬だけ見てきた。そして、その『鍵』を右手に持ち、扉の前に立った。

そして有無を言わずその鍵を振り上げ、思いつ切り扉に向けて振り下ろした。鉄格子の扉と剣の刃がぶつかり、鈍い音が響いた直後、扉は碎け、崩れ落ちた。

「見るのだ！ 見事に開いたのだ！」

「思いつ切り力任せじゃねえかよっ！？」

そして、開け放たれた入口から勢いよく人が出ていく。俺とゼクスはそれを無視して牢屋の中で向かい合っていた。

数秒後、牢屋の外のランプが光り、それと同時に警報が鳴った。「了也殿……ここが最後のチャンスなのだ。神風殿と同じく戦いの中にその身を置く覚悟が無いのなら警備隊に捕まれば良いのだ。戦いの中にその身を置く覚悟があるのなら、我と一緒にアイリス女王国を目指し、神殿騎士になるのだ」

鳴り響く警報を聞いた警備隊がぞろぞろと集まってきた。それでも俺とゼクスは慌てずに牢屋の中で向かい合っている。

「親父と同じってのは気に入らないが……どうせここに残ったら死ぬし、さっき乗り掛かった船だ。一緒に行かせて貰う」

ゼクスはぼそりと良い返事なのだ。と言って、さらにもう一本どこからともなく剣を出した。そして、右手に持っていた剣を石畳に突き刺し、その上に横にしたもう一本の剣を器用に乗せた。

ゼクスはその近代アートとも呼べそうな剣のオブジェの上に腰を下ろしてこっちを見た。そして一言。

「警備隊も倒せない者がどうして神殿騎士を目指そうと思うのだ！

さあ、警備隊を倒すのだ！」

「――なっ!？」

ゼクスのその声とはほぼ同時に警備隊が牢屋の中に流れ込んできた。扉が完全に破壊されていたので、閉じ込め直すことを諦めて、捕縛しに来たのだろう。

警備隊の中の一人が俺の胸元を掴んできた。こんな喧嘩紛いの事なんて本当に小さい時に近所の奴らとやり合って以来だ。こんな勝てるはずが無い。

そう思いながらも、取り合えず交戦を試みた。胸倉を掴んできた警備隊の顎に肘を押し込み、引きはがしてから腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。その様子を見たゼクスが後ろの方でおおーとかなんとか言ってるがそんな事を気にしている暇は無い。次から次へと襲い掛かって来る警備隊を殴ったり、蹴ったりで無理矢理引きはがして

いく。

しかし、思いの外警備隊はあっさりと吹き飛んで行く。これはもしかしたら勝てるかも知れない。だから俺は必死に警備隊を丁寧に1人ずつ引きはがしていった。

だが、一向に数が減る気配がしない。まるで無限に相手が存在している様な……。

――そして、俺は気付いた。

警備隊が弱くて簡単に吹き飛ばせているのでは無い。もともと警備隊は自ら後ろへと飛び退いて居たのだ。

数自体も実はそこまで居なかった。空間を把握仕切れていなかった俺はただただ数が多いのだと思っていたが、吹き飛ばされた警備隊が立ち上がりひたすらに襲ってきていたのだ。

「あー……了也殿。もう良いのだ」

そんなゼクスを俺は聞き流し、相変わらずワンパターンに交戦する。相手のちゃんとした目的も知らずに。

「了也殿ー、了也殿ー。もう良いのだ、我の後ろに下がるのだー」
警備隊も警備隊で相変わらずワンパターンに襲い掛かって来る。それを俺はひたすらに蹴飛ばし、殴り飛ばし……。

「いい加減にするのだっ！ 下がれと言ったら下がるのだっ！」

ゼクスが叫んできて、始めて俺は手を止めた。手を止めた直後に襲い掛かってきた警備隊は、ゼクスが一瞬の内に俺との間に割り込んできて蹴り飛ばした。

「戦場で命令を無視するとそれは死に繋がるのだぞっ！ 何を血迷っているのだっ！ 我に従え！ まだ了也殿は神殿騎士では無い！

一般人なのだ！」

そう言いながらゼクスは次に襲い掛かって来た警備隊を掴み、持ち上げた。そしてあろう事か、その警備隊で他の警備隊を殴打した。「相手の目的を考えるのだ。数であっちが上回っているのなら別に

戦う必要は無い。了也殿を疲れさせればそれだけで終わりなのだ。だから相手はわざと飛び退いていたのだ」

ゼクスは解説をしながら、1人の警備員で全員を奥へと追いやり、直ぐにいつの間にか二本とも石畳に突き刺さっていた剣を引き抜いた。右手に1本、左手に1本。それぞれを一振りずつして警備隊全員を気絶させた。

「安心しろ、ミネウチなのだ……」

そう言ってカッコつけたゼクスの両手には、両刃の剣が握られていた。

「強いんだな」

「伊達や酔狂で神殿騎士をやっているわけじゃないのだ」

ゼクスはそう言いながら直ぐに牢屋の外へと踊り出て、俺にも脱出を促した。

「説教はこの後脱出してからなのだ！ さあ、行くのだ！」

そして走り出すゼクス。それを後ろから追い掛ける俺。しかし、そのスピードは余りにも違いすぎて、出口までの道筋で通る必要のある大広間で見事に振り切られそうになってしまった。

「まっ！ ゼクスッ！ 早いって！」

「あゝん？ 大分スピード落としてるのにこれでも追いついてこれないのか？」

そう言ってゼクスは立ち止まった。そう言われて俺は本気で走った。そして、大広間には重低音が響いた。

薄っぺらく表現してしまえばガタン、ガタンと言うまるで機械が歩いて来るような音。まさか巨大兵器など無いだろうと思いつながら走っていた俺とゼクスの間に割り込んできたソレによって俺の楽観的思考は崩れ去る事となった。

「うわぁーお、巨大兵器なのだ」

「うわぁーおじゃねえよ！？」

巨大兵器……大広間はずっと天井が異様に高い所だ。軽く10メートルはあると言うのに、その巨大兵器はその天井にぶつかりそ

うな程大きな人型の兵器だった。しかしなによりも恐ろしいのはその兵器の大きさでは無く、その頭部にあからさまに存在している銃口……それが俺の方に向いている事だ。

「あちゃー、標的は了也殿なのかー」

「そんな言葉で済まそうとするなああああつ！」

俺は咄嗟の機転で巨大兵器の左側へと身を翻し、そのままゼクスの方へ行くつもりだった。しかし、足には足で何かが発射されそうな穴があったので、素直に止めた。

「了也殿ー！ 多分足からミサイルが出るから気をつけるのだーつ！」

うん、止めて良かった。

「神風殿から預かった、風夢家に伝わる武器を投げるからこれで応戦するのだー！ 行くのだーつ！」

その言葉の意味を理解して、ゼクスの方を見た時には既にゼクスは野球の投手よろしく全力投球のフォームをしていた。

武器って言うのは物によるが、大体が大体相手を殴ったり斬ったりするために存在している物であって、ソレを投げて飛ばしてきて俺に当たったら死ぬ訳で、そして人間の反射神経は決して性能は良く無くて、この距離で投げられたらなかなかの確率で直撃は免れないわけであって。

そして俺は考えるのを止めて身体を丸めた。

「馬鹿ーっ！ そんなもん投げるなーっ！」

とかなんとか暴言を吐きながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6051p/>

永遠の歴史

2011年1月5日16時40分発行